

6 飛鳥の瓦と百濟の瓦

花谷 浩
(出雲市文化企画部)

A はじめに

百濟は飛鳥の瓦づくりの故地である。588年の飛鳥寺造営に際して、百濟からやって来た多業種の工人たちには、瓦工人が含まれていた。このことは文献記録にあるおりだし、仏像（飛鳥大仏など）と同様、瓦もまた百濟様式のものであった。瓦の作り方も百濟直伝だった。飛鳥寺創建時には二つの瓦工人集団、花組と星組があり、星組工人はその後、豊浦尼寺、斑鳩寺、難波寺（四天王寺）などの造営に参画した。

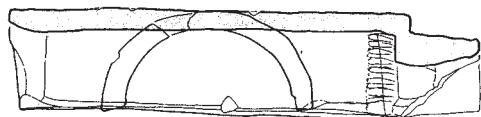
花組と星組つまり、桜花形型式と弁端点珠型式の蓮華紋の違いが、行基丸瓦（無段式）と玉縁丸瓦（有段式）という丸瓦型式、および丸瓦接合手法（とくに星組の片柄接合）との差違に深く結びついているが、これは百濟では必ずしも普遍的なものではない。桜花形蓮華紋の軒丸瓦に片柄接合手法がともなうものは益山・弥勒寺跡などにあり、行基丸瓦で片柄接合手法をとるものは扶余・亭岩里瓦窯跡などに存在する。飛鳥寺にきた花組と星組の瓦工人集団は、百濟のどこかにあった技術セットがたまたま渡来した、と考えるほかない。

日韓の瓦作りの技法について、その当初の交流のあり方はかなり判明しつつある、と思う。しかし、その後、継続的に同じような交流はあったのだろうか。

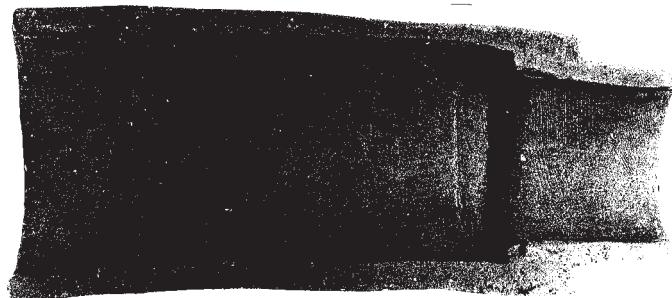
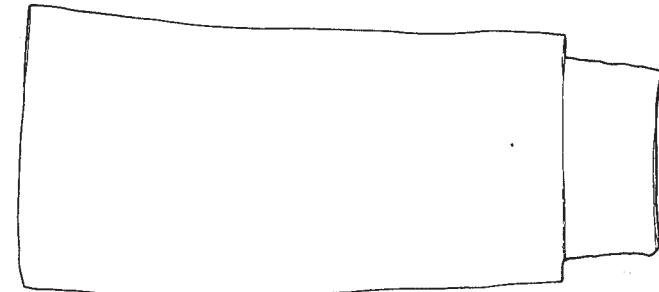
B 玉縁丸瓦における二者

玉縁丸瓦の縦断面形とその作り方に一定の変化の方向性があることは、古くに浦林亮二が指摘している。法隆寺（斑鳩寺）の瓦を分析資料とした成果だ。飛鳥寺や斑鳩寺では当初、模骨は筒部だけのもので、玉縁部は模骨の上端に粘土紐や粘土板を積み上げて作成された。のちに、玉縁部までの模骨を使った玉縁丸瓦へと変化する。

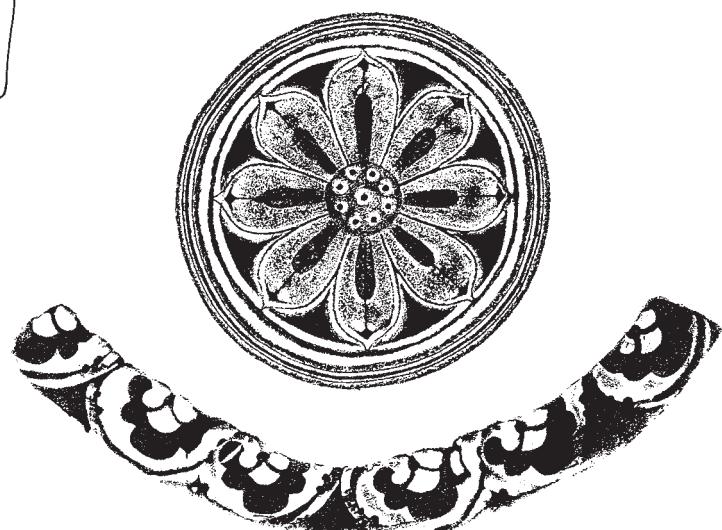
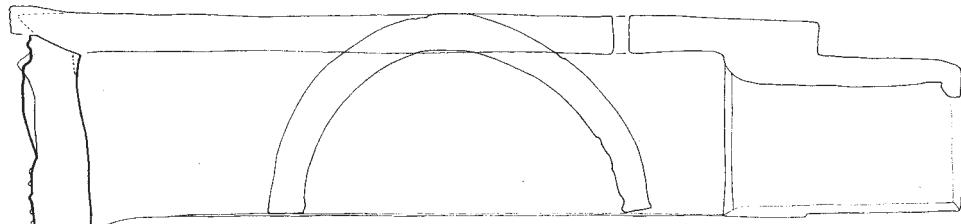
飛鳥において、玉縁までの模骨で製作された丸瓦を全面的に採用したのは、吉備池廃寺（639年創建の百濟大寺）と山田寺（641年創建）だ。ともに軒丸瓦は、蓮弁に子葉をおく単弁蓮華紋（山田寺式）の紋様をもつ。一方、二つの寺にほど近い安倍寺では、蓮華紋には同種のものを用いるが、丸瓦の型式は旧来のもの、つまり玉縁部内面に布压痕がない型式だった。いずれにしろ、飛鳥での玉縁丸瓦の型式変化、製作法の変化が640年を前後する頃だったことは、ほぼ認めてよからう。



1. 飛鳥寺の玉縁丸瓦



2. 吉備池廃寺の玉縁丸瓦



軒丸瓦ⅠA-軒平瓦ⅠA
3. 吉備池廃寺の軒瓦

図1 飛鳥の玉縁丸瓦

このような変化は、百濟の影響なのか、飛鳥つまり日本列島での工夫なのか。

山田寺式単弁蓮華紋とまったく同じものは百濟にはない。外縁の重圏紋もない。紋様とセットで瓦作りの技法が伝來した6世紀末のような状況ではないようだ。

百濟において、玉縁丸瓦に2種類、つまり玉縁部内面に布压痕のない玉縁部積み上げの丸瓦と、玉縁までの模骨を使う玉縁丸瓦との2種類がともに出土している遺跡に、陵山里廃寺（陵寺）がある。

陵山里廃寺は、扶余の東、羅城の東外郭に位置する。百濟王陵の並ぶ陵山里古墳群に附属する寺院と考えられている。1992年から2002年にかけて中心伽藍が発掘調査され、金銅製大香炉や花崗岩製舍利龕などの発見があった。

陵山里廃寺の報告書では、出土した蓮華紋軒丸瓦をI類型からVIII類型に分類し、I類型についてはさらにa～dに細分した。一方、金鍾萬は16種類（ほかに蓮華紋以外2種類）に整理できるとした。以下、両者の対応関係を記す（かっこ内が金鍾萬分類）。

I類型a⁽¹⁾（IDb5ア形・イ形）、I類型b（IA形）、I類型d（IDb1形）、II類型（ICb4ア形）、III類型（ICb3ア形、ICb2ウ形）、IV類型（IEb3イ形）、V類型（ICb5ア形）、VI類型（ICa4イ形）、VII類型（IBb3イ形）、VIII類型（該当形式なし）。このうち、III類型は2種に細分できるので、かりにIII類型「a」とIII類型「b」とする。

また、金分類にあって報告書で分類されていないものは、かりに型式名を付し、IDc2形を「IX類型」、IDa3形を「X類型」、IBa5ア形を「XI類型」とした。

陵山里廃寺で丸瓦部に玉縁丸瓦を接合し、その玉縁丸瓦が2種類あるのはI類型a。金鍾萬は、この型式が陵山里廃寺創建瓦とみて、その年代を「A.D.567年が下限となる」とした。出土量が最多というのを、創建軒丸瓦とみる理由としている。それ以外の軒丸瓦は、567年から百濟滅亡の660年の間に位置づけられる、という。

報告書の軒丸瓦一覧表から算出すると⁽²⁾、木塔跡周辺から出土した軒丸瓦は、I類型aが12点、のほかIII類型b・VI類型・VII類型が各1点。I類型aがもっとも多くある。

となると、玉縁丸瓦2種はすでに6世紀後半に併存しており、飛鳥に来たのはたまたま筒部のみの模骨を使う丸瓦作りの技法だったということになるのだろうか。

しかし、軒丸瓦I類型aを創建軒丸瓦とみることに疑問がないでもない。

木塔同様に、軒丸瓦一覧表から、金堂跡周辺で出土した軒丸瓦について型式別の数量を判別すると、次のような結果となった。

I類型a：3点、IV類型：2点、V類型：7点、I類型b・IX類型・X類型：各1点。

（合計15点。このほか、金堂・木塔跡中間からI類型aが2点、X類型1点が出土）

これをみると、弁端が比較的尖っているI類型b、IV類型とV類型が過半数を占めている。

また、中門跡では、I類型bとVII類型が2点ずつ出土している。VII類型も弁端が比較的尖る型式だ。南回廊跡でも、I類型aとX類型が2点と、I類型b・V類型・VIII類型が1点ずつあ

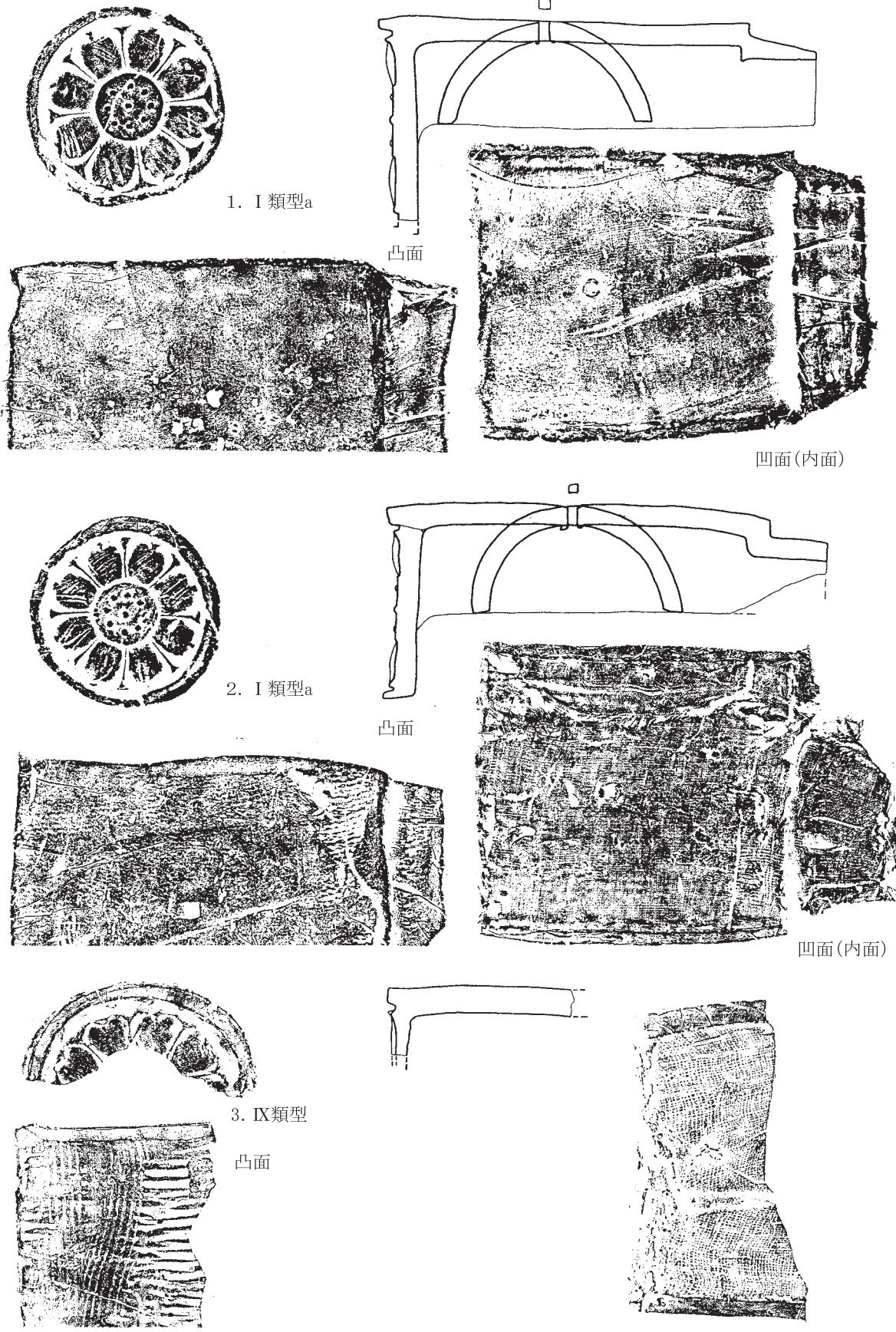


図2 陵山里廃寺の軒丸瓦(1)

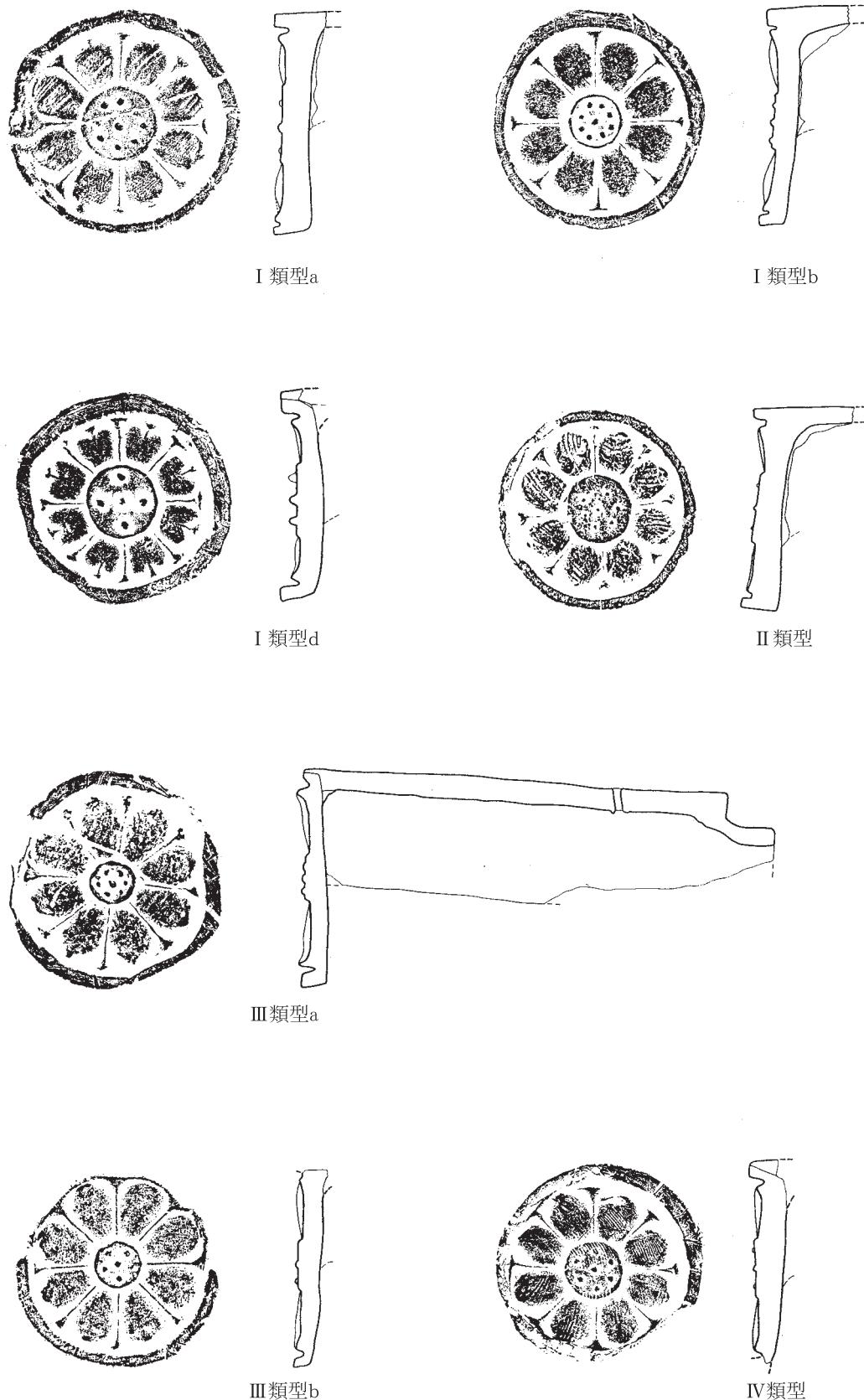
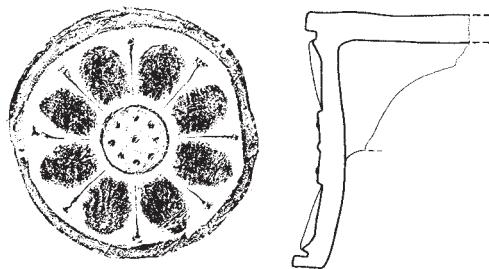
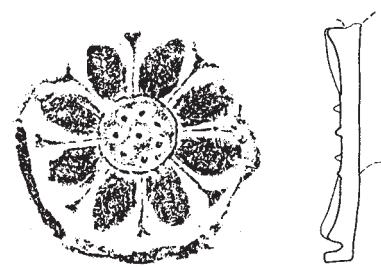


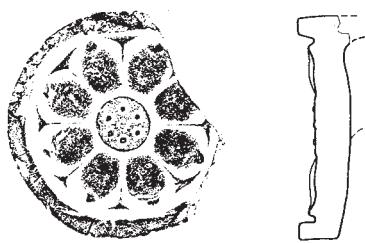
図3 陵山里廃寺の軒丸瓦(2)



V類型



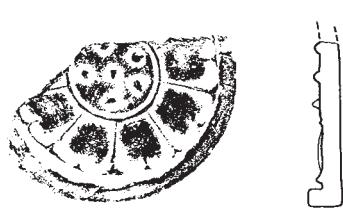
VI類型



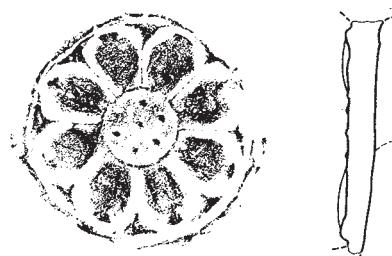
VII類型



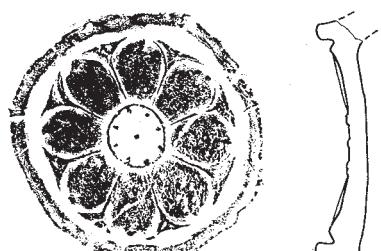
VIII類型



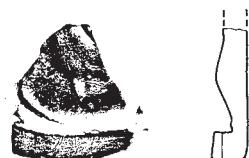
IX類型



X類型



XI類型



XII類型

図4 陵山里廃寺の軒丸瓦(3)

って、I類型aは卓越した出土数を示さない。

弁端が比較的尖る型式は、金鍾萬が類型化した「I型」にあたる。金鍾萬も、これが陵山里廃寺中門跡附近から出土したことから、6世紀中葉に近い年代とも述べている。陵山里廃寺のI類型b・IV類型・V類型・VII類型などを、創建軒丸瓦とみる可能性は十分あるのではないかと考える⁽³⁾。

I類型aは、範傷のかなり大きいものがあって、それらが新しい型式の丸瓦をともなっている可能性もあり、陵山里廃寺での玉縁丸瓦の技法変化は7世紀に降るものと考える。

さて、陵山里廃寺の玉縁部に布圧痕をもつ丸瓦には、布筒を模骨になじませるために段部に細い紐を巻き付けた痕跡がある。同様の手法は、飛鳥では川原寺にあり、そのほか法隆寺西院伽藍創建丸瓦にもある。時期的には7世紀後半の早い段階に確認できるわけだが⁽⁴⁾、吉備池廃寺や山田寺など7世紀前半の資料では未だ確認していない。この手法について日韓の関連性はあるのだろうか。

また、陵山里廃寺の玉縁部まで布圧痕がある丸瓦は、すべて凸面にタテ方向の縄叩き痕を残している。これに対して、玉縁部に布圧痕のない丸瓦は、格子叩き痕などを残していて、叩き板の違いが明瞭だ。この叩き板の変化の方向性は、飛鳥での状況と似た部分がある。

飛鳥寺の創建瓦には、花組の平瓦の一部にハナレ砂を使用する縄叩き締めのものがあるが、数は少なく、しかもその後に続かない。飛鳥寺や斑鳩寺をはじめ、吉備池廃寺、山田寺あたりまで、つまり7世紀前半の飛鳥の寺院跡では、縄叩きの丸瓦・平瓦をその創建瓦としない。

これが転換するのは、660年代の造営と推測される川原寺。縄叩きの瓦が多数を占めるようになり、680年代に造営された本薬師寺ではさらにその傾向が顕著となる。時期のずれはあるものの、叩き目の変遷が日韓で共通しているのではないか。この点でも、百済での状況が明らかになることが期待される。

C 接合手法の変化

6世紀の末に飛鳥に伝來した瓦づくりの技術は、花組の場合、飛鳥寺でその造営期間を通じて継承された可能性がある。ただし、飛鳥寺I型式（桜花形蓮華紋）は、ある段階（I型式b段階）で瓦陶兼業窯での生産にかわっている。当初、瓦当裏面の上端に丸瓦をのせるだけだった接合手法は、丸瓦先端を瓦當に深くくい込ませる手法へと変化する。これは瓦当厚の増大とも関連するのだろう。この過程で、丸瓦に刻み目を入れるようになる。

星組の接合手法は、丸瓦先端を片柄形に加工するのが特徴だが、山田寺の場合は640年代まで残っている。だが、ほぼ同年代の吉備池廃寺にはそれはない。斑鳩寺でもそれ以前、おそらく620年代くらいには、凹面側を大きく削って楔形にする手法へと変化した。しかし、いずれも花組のように瓦當へ深くくい込ませる接合手法はとらず、側面に接合するという基本的な考え方方は受け継がれるとみえる。

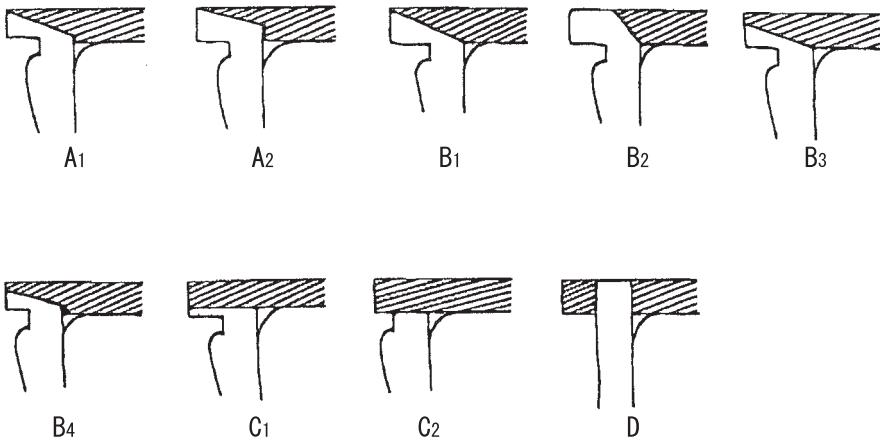


図5 陵山里廃寺の接合手法(金2000)

陵山里廃寺の場合、I類型bとV類型が片枘接合をしていて、そのほかは先端を楔形に加工した丸瓦を瓦当側面に接合したり、未加工の丸瓦をやはり瓦当側面に付けたりしているようだ。丸瓦の先端を瓦当にくい込ませる手法がまったくみあたらないのは、注目される。

次に、益山・弥勒寺跡の軒丸瓦についてみてみよう。弥勒寺は、武王代（600～641）に創建された百濟最大の寺院である。1980年代からの発掘調査により、中央に木塔をともなう伽藍、その左右に石塔をともなう伽藍を併置した巨大伽藍が判明した。また、最近、西石塔から多量の宝物が発見され、あらためて注目されている。

創建の百濟様式軒丸瓦には、素弁蓮華紋（報告「単弁A～D」）、忍冬弁蓮華紋（「単弁E」）、単弁蓮華紋（「単弁F・G・I」）、複弁蓮華紋（「複弁B」）がある。単弁E・F・Gは六弁の蓮華紋。

これらのうち、素弁蓮華紋の4種、忍冬弁蓮華紋の2種（「単弁E-1・E-2」）、単弁蓮華紋の3種（「単弁F-1・F-2・I」）と複弁蓮華紋の1種、以上はすべて丸瓦先端を片枘型に加工して裏面と側面に貼りつける接合手法をとっている。八弁の弥勒寺Aの片枘は端面からの切り込みが短いが、六弁忍冬弁の弥勒寺E-1は端面からの切り込みが長いので、丸瓦の先端が外縁にとどく。

六弁で単弁の弥勒寺G-1は、六弁忍冬弁が簡略化されたような単弁紋の軒丸瓦で、弁の照りむくりは弱い。丸瓦部は、広端の凹面側を深くヘラケズリして断面楔形に加工した後、タテキザミ目を入れて瓦当の上端に接合されている。もう一つの単弁六弁のG-2は、G-1とは逆に、丸瓦広端の凸面側を深く削って断面楔形に加工し、瓦当の上端にのせてある。この2型式は、弥勒寺AやE-1に比べると瓦当が分厚い。側面には調整の痕跡がなく、木製枷型の圧痕と合わせ目が明瞭に観察できる⁽⁵⁾。

接合手法が特異なのは、単弁のF-3。報告書では丸瓦の接合手法は明記されず、周縁の脱落した瓦当の側面部分に布の圧痕がある、とされているのみだった。だが、資料をみると、布

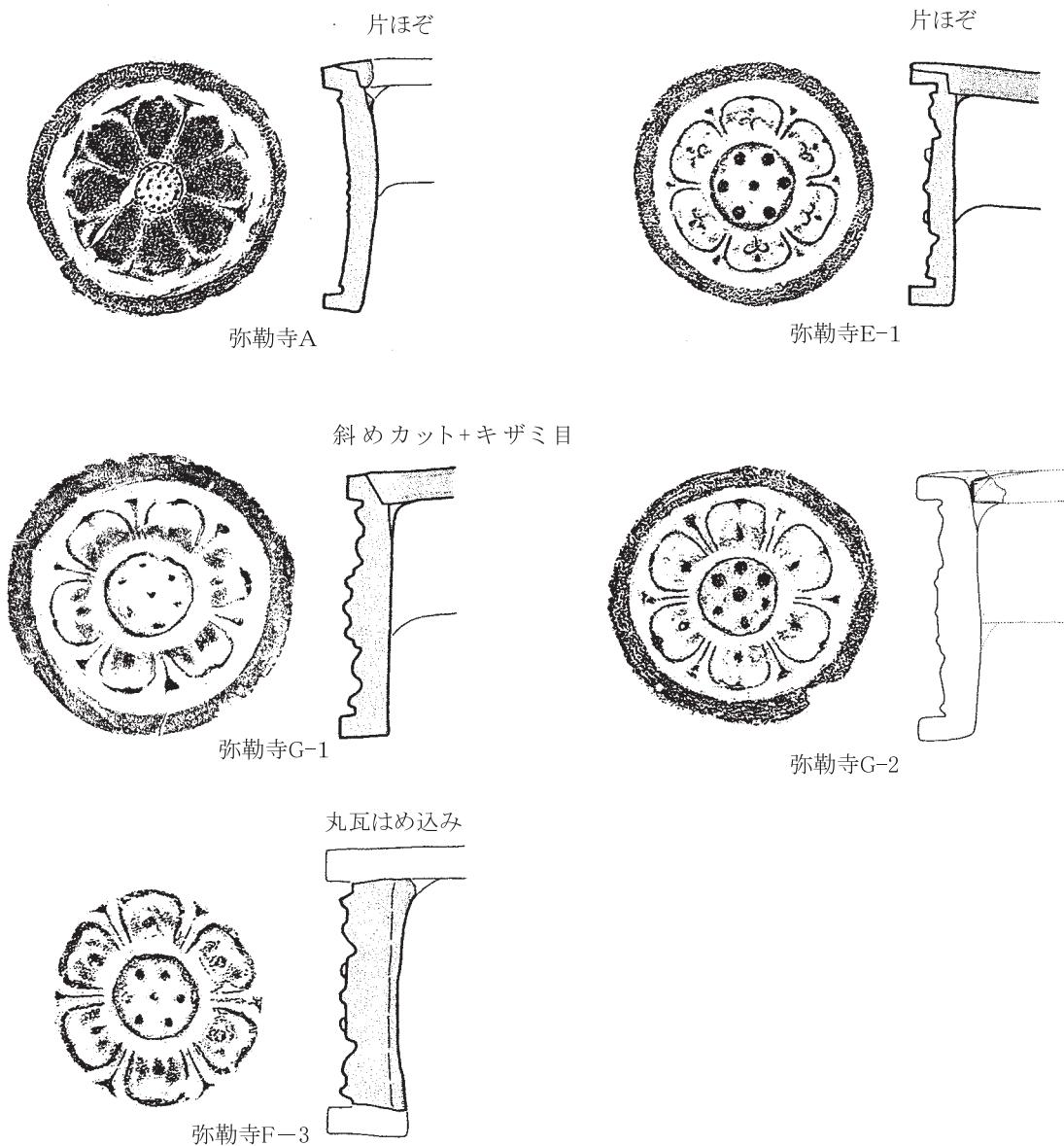


図6 弥勒寺跡の軒丸瓦

の圧痕は側面を全周している。これは「嵌め込み式」の成形手法の痕跡と判断される。

観察結果をもとにその工程を復元すると、まず、瓦缶の内区部分にだけ粘土を詰め込む。次に、外縁となる部分へ、分割前の円筒状の丸瓦をかぶせるようにして嵌め込む。その後、瓦当下半分にある丸瓦円筒の半分を切り取る。瓦当裏面全体に薄く粘土を貼り足し、この粘土を丸瓦部の凹面側にナデつけて丸瓦部を固定する。丸瓦の切り取りはほぼ瓦当裏面の高さでおこなわれ、瓦当裏面の下半分には土手状の突帯は残らないらしい。裏面の調整も丁寧におこなわれている。F-3の出土資料ほぼすべてで外縁が完全に脱落するのは、丸瓦円筒と瓦当部との接着が不十分だったことに起因するのだろう。

このように、弥勒寺跡の軒丸瓦接合手法は4種類に細分でき、瓦当文様をみると、片枘接合の一群は創建期にさかのぼるのだろう。先端の凹面側をヘラケズリして接合する手法と「嵌め込み式」とは、一応、瓦当の側面に丸瓦を接合するという特色を継承しているが、丸瓦の凸面側を削る手法では、瓦当裏面への接着手法なので、やや趣を異にするといえる。

さて、公州・扶余の百濟軒丸瓦で、「嵌め込み式」の成形手法をとるものは、報告例を知らないし、ほかにみたことがない⁽⁶⁾。これが弥勒寺跡だけの特徴なのか、扶余地域などのほかの寺院跡にもあるのか、今後の研究に期待したい。また、陳内廃寺（熊本県城南町）など九州に点在する「嵌め込み式」も、畿内だけでなく韓半島との関連を考慮する必要があろう。

D 「竹状模骨丸瓦」のルーツ

九州と畿内に分布する「竹状模骨丸瓦」は、細い棒状の素材を簾のように細紐で綴じ合わせたものを模骨として製作された丸瓦を指す。この瓦については、その類似資料が韓半島になかったが、1994・1995年、月坪洞遺跡の調査でようやくその端緒がみつかった。月坪洞遺跡は、大田市街の西方、月坪洞山城の東南に位置する。

出土したのは丸瓦と平瓦だけで、軒瓦はない。報告書では、丸瓦を3種類、平瓦を6種類に分類している。一般的な粘土板模骨（桶）巻き技法の瓦は、丸瓦・平瓦ともI類とされた1種類だけだが、出土量では他を圧倒している。少数だが、丸瓦2種類と平瓦5種類は、凹面に通常とは違った成形痕跡を残していた。

報告書によると、丸瓦II類と平瓦IV類は、凹面に「葦の簾の痕跡」をもち、平瓦III類はこれに布圧痕が加わる、という。「葦の簾の痕跡」と表現された圧痕は、葦のような細い棒状の素材を簾のように編んだものによることは間違いない。多いものでは10段に編んである。

平瓦III類は、この簾状の圧痕に布圧痕が重なるので、簾状の模骨に布を巻いて粘土を巻きつけたと考えられる。これに対して、丸瓦II類と平瓦IV類には、布圧痕がないので、布を巻きつけないのか、布の代わりに簾状のものを使ったのかだ。

また、丸瓦III類と平瓦V類は凹面に「縄蓆紋」がある瓦と報告されているが、佐川正敏によると、これは細い縄を編んでつくられた編布（あんぎん）だという。縄を模骨とすることは不可能なので、布筒に替えて編布を模骨に巻いて作られた瓦とみるほかない。同様の平瓦は、錦山・栢嶺山城からも出土しており、古代山城に特徴的な瓦製作技法と推測される。

月坪洞遺跡の瓦は、日本の「竹状模骨丸瓦」とまったく同じ技法のものというわけではないが、一木あるいは細い板を綴じ合わせた模骨以外のものを使った瓦作りの技術が百濟に存在することは、確実となった。

しかし、解明すべき問題点も多々ある。畿内（大和）の「竹状模骨丸瓦」は、坂田寺例が古く、7世紀後半でも早い頃と推測される。出土量の多い飛鳥寺禪院（生産は飛鳥池瓦窯）は、7世紀後半の中頃あたりの年代であろう。これらと、九州の豊前（福岡県東部）を中心に分布

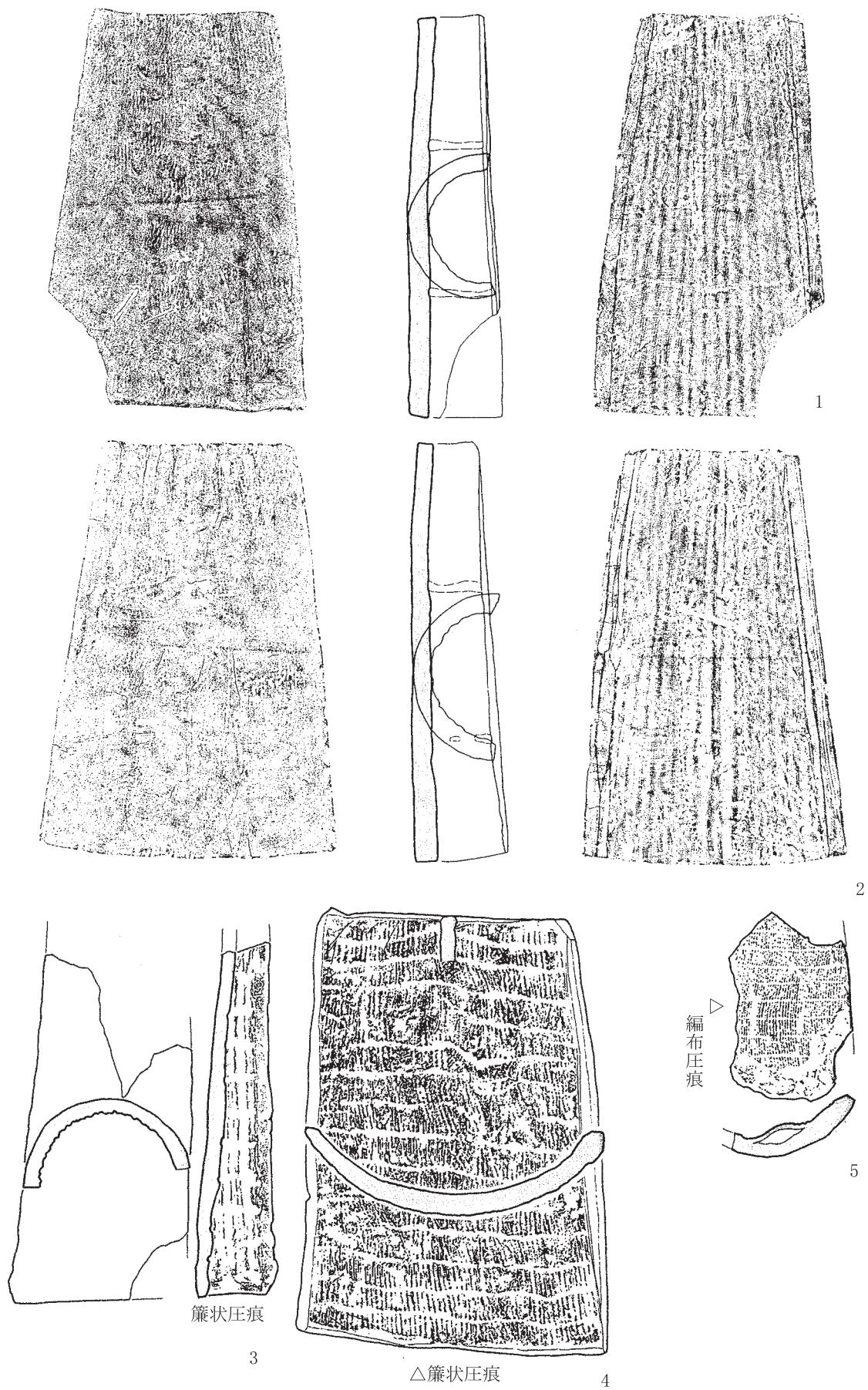


図7 飛鳥寺の「竹状模骨丸瓦」(1・2)と月坪洞遺跡の瓦(3~5)

する「百濟系单弁軒丸瓦」にともなう「竹状模骨丸瓦」は関連性があると思われる。しかし、筑前（福岡県北部）の那珂遺跡などから出土する同種の瓦には、土器からみて7世紀の初めにさかのぼる例があり、これらの存在は現状では孤立的である。

百濟では、「竹状模骨丸瓦」に類する瓦が、古代山城に限って出土するようだ。築城技術の一つとして瓦作りが存在したとみるほかないが、それがどのような経緯で日本列島に伝来し、寺院に導入されたのか。詳細は今後の検討が必要だが、畿内の「竹状模骨丸瓦」の年代からすると、それは西暦660年の百濟滅亡に前後する頃のことだったのではないか。飛鳥寺禅院を建てた道昭の帰國は齊明7年（661）。あるいは、「竹状模骨丸瓦」は70年を超える百濟とわが国との瓦技術交流の最後を飾るものだったのかもしれない。

E おわりに

以上、玉縁丸瓦の製作手法、接合手法の変化、「竹状模骨丸瓦」の3項目について、飛鳥と百済の瓦を比較検討した。西暦588年の瓦博士来日以来、彼我の瓦技術交流は連綿と続いていたであろうが、その具体相を検討することができるだけの資料がかなり蓄積されてきつつある、といえよう。

日本でもそうだが、韓国で大面積の発掘調査が実施され、古代寺院単位でそこに葺かれた瓦の様相が明らかになってきたことの意義はたいへん大きい。弥勒寺跡、陵山里廃寺（陵寺）、王宮里遺跡などに続き、官北里遺跡（王宮跡）、王興寺跡、軍守里廃寺、帝釈寺跡などの調査が進展している。これらの調査によって、扶余地域の寺院ごとの瓦当文様の違いと共通性が解明され、さらには、扶余地域とそれ以外の地域に造営された寺院の瓦当文様と製作技法の違いが明らかになれば、日韓の瓦技術交流についてさらに興味深い歴史がわかつてくるだろう。

今回は、対応する時期のわが国の瓦資料が存在しないこともあって、漢城期の瓦、風納土城跡や石村洞古墳群などの瓦はとりあげなかつたが、その存在は東アジア全体をみたときにも重要なものがある。また、別の機会に考えてみたいと思う。

最後になりましたが、韓国での調査にご協力いただいた国立文化財研究所、国立博物館をはじめとする多くの機関と先生方に深く感謝いたします。

註

- (1) 報告書のI類型cはI類型aとの違いが不明瞭なので、I類型aに含める。ただし、I類型aと一括したもののがすべて一つの瓦範と考えるわけではない。
- (2) 一覧表に掲載された資料が出土品のすべてではないだろうから、この作業結果はあくまで限界をかかえている。
- (3) 扶余・王興寺でも弁端がやや尖った素弁八弁蓮華紋軒丸瓦が出土している。王興寺は、近年の調査によって、その創建年代が577年と判明した。

- (4) ごく少数だが、藤原宮（694～710）の丸瓦にもある。これらの丸瓦の製作時期は680年代にさかのぼる可能性が考えられる。
- (5) 百済の軒丸瓦で枷型の使用が確認されたものは少ない。だが、垂木先瓦は側面に文様をもつ弥勒寺の縁軸垂木先瓦をはじめ、枷型使用が明瞭なので、広範に存在した技術だったと考える。
- (6) 漢城期には存在する。また、新羅の月城などからも、瓦当裏面に丸瓦円筒を接合して半分を切り取る手法の軒丸瓦が出土するが、「嵌め込み式」ではない。

参考文献

- 亀田修一 2006 『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館
 金鍾萬（鄭桂玉訳） 2000 「扶余陵山里廐寺址出土瓦当文様の形式と年代観」『帝塚山考古学研究所研究報告』II
 金鍾萬 2002 「泗沘時代瓦にあらわれた社会相小考」『国立公州博物館紀要』第2輯
 国立公州博物館 1999 『大田月坪洞遺蹟』国立公州博物館学術調査叢書第8冊
 国立扶余文化財研究所 1996 『弥勒寺 II』国立扶余文化財研究所学術叢書16
 国立扶余文化財研究所・扶余郡 2000 『陵寺』国立扶余博物館遺蹟調査報告書第8冊
 国立扶余博物館・忠清南道歴史文化院 2007 『忠清南道歴史文化院新発掘百済文化展』
 文化財管理局文化財研究所 1988 『弥勒寺 I』
 梁宗鉉 2008 「百済の瓦—近年の出土品を中心として—」『考古学ジャーナル』No.576